小麦（緑部分、雑草含む）が立毛間播種された大豆の転作田。農地、機械の有効活用と省力化が大規模経営を支えている＝10月18日、北上市和賀町後藤

あの日の決断

岩手の経営者たち

「もったいない」原点

農地引き受け規模拡大

北上市和賀町後藤の30ヘクタールの大豆の転作田。10月半ば、西部開発農産の前社長、照井耕一さん(74)が操るコンバインが、軽快なつち音を立てていた。4年前に白血病を患い、生死の境を見た。今秋は、その時以来となる刈り取り作業を任され「ぼけ防止に一番。ぐっすり寝られるし、酒もうまい」と張り切る。

同社が作付けを行う農地の実面積は北上市を中心に、北は花巻市から南は奥州市胆沢までの約840ヘクタール。県内の1経営体平均は2・6ヘクタールで、同社の規模は桁違い。二毛作も行い、本年度は水稲、大豆、小麦、ソバなど約970ヘクタールの作付けを計画する。

作付けは創業した1986年（53ヘクタール）の18倍強に上り、特にこの10年で倍増した。飛躍的な発展の陰には、照井さんの「もったいない精神」があった。

耕地のうち同社所有は約2割。多くは、高齢化や担い手不在で作付けできなくなった農家からの借地と、生産調整で転作を任された農地だ。

水分が多い、区画が狭い、日陰、土地が痩せている―。悪条件の場所でも、構わずに引き受けてきた。

「食べ物を作るのが楽しいから、困っている人がいれば引き受けた。西部はこのやり方で信用されてきた。せっかくの農地で何も作らないのは、もったいない」

どこまで広げる気ですか、農業には適正規模があります―。面積が増えてきたころ、国の役人の一言に、闘志をかき立てられた。

「規模拡大が目的だったわけではないが、適正規模という考え方は好きじゃなかった。農機や農地をフル活用すれば、機械、設備の償却をしながらでも利益は出せる」と照井さん。挑んだのが約20年前、県内で当時ほぼ例がなかったというソバの裏作だった。

夏に小麦を刈り、秋に次の種をまくまでの期間を使って、ソバを作った。この方法は、小麦の収穫の際にソバが混じるコンタミ（異物混入）の心配が大きかった。

「農協などには無理だと言われた。社員の負担も増えたが、土地の利用率が上がり、収入にもなると思ってやることにした」

除草剤の適期散布を徹底して、ソバが残っていれば手で取った。自分たちの技術を信じて続けた。ソバは今、約2千万円の売り上げを出すまでになった。

水稲の「直まき」、大豆、小麦などの「不耕起栽培」、大豆の刈り取り前に小麦をまく「立毛間播種」。貧欲に新技術を取り入れ、作業の省力化に努めた。本社敷地には大型機械がずらりとそろい、ライスセンターや加工場、倉庫などが立ち並ぶ。

会長職を退いて2年余。同社が作付けを頼まれる農地は、悪条件の所がますます増えている。照井さんは現状を理解しつつ、〝原点〟を訴える。「うちは借り受けるのが前提。どうやればできるのか、まずは考えることだ」と。

西部開発農産は32年前、県内の農業法人の先駆け的存在として設立された。一人の農業改良普及員が、照井さんの背中を押した。

（次回から総合面に掲載）

西部開発農産 北上市和賀町後藤に本社を置く農業法人。作付面積は北上、花巻、奥州、金ケ崎の3市1町の約970ヘクタール（本年度計画）。照井勝也社長。資本金2697万円。1986年に照井社長の実父で前社長の耕一氏が有限会社で創業。積極的な農地の借り受けで事業規模を広げ、現在は水稲、大豆、小麦、ソバなどを生産する。96年に畜産を個人から法人事業に移した。肉牛の飼養頭数は約250頭。みそ、乾麺などの加工事業のほか、北上市内で焼き肉店1店も経営する。2010年日本農業賞大賞。11年株式会社化。15年にベトナム・ハノイに現地法人を設立した。従業員108人（18年4月現在）。18年3月期の売上高は5億1600万円。